博士論文（要約）

自閉スペクトラム症の描画表現に関する
臨床心理学的研究

―自己理解と他者関係への影響に着目して―

石川 千春

第 I 部
自閉スペクトラム症の描画表現に関する概観と自己との関連

第 1 章　描画表現に関する概観と展望

本論文は，自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorders; 以下，ASD とする）の人の描画表現について，自己との関連に着目して論じるものである。ASD とは,「社会的コミュニケーションや対人的相互作用の障害」および「限定された反復的な行動，　興味，または活動の様式」が発達早期より出現し，生涯にわたって継続する神経発達障害とされる（American Psychiatric Association, 2013; 髙橋・大野監訳, 2014)。このような障害があるために，ASD 者は自己に対する理解や他者との関係に関して困難を抱えることが知られるが，これまで言語的な手法が多かった ASD 研究に描画表現という非言語の視覚的ツールを導入することで，新たな方向から支援を検討する。

描画表現は，人類が自らの経験を文字で記録するようになるはるか以前より活用してきたもの（Gaillard, 2017）であり，自己の統合や成長につながること（Lowenfeld, 1957; 竹内・堀内・武井訳, 1963）や，社会的な活動へと導くものと論じられる（Vygotsky, 1925; 柴田訳, 2006)。イメージや感情を外在化しながら外的環境を知覚し，省察を加えてさらなるイメージや行為を探索し，環境の中にものごとを生み出していく行為であると提唱される（岡田, 2013)。イメージを外在化することで自己を意識的に検討することを助けるとされ（Wilson, 1985)，　形をとらない自己概念が，描画によって可視化されることで自己について検討しやすくなる。芸術療法としての描画表現によって自己理解が促進される可能性が示唆され（藤中, 2010)，自己をより良く理解することへとつながることが考えられる。

一方，従来の ASD 支援の問題点として，社会性の支援でよく用いられるソーシャルスキル・トレーニング（SST）等は，日常生活での応用が困難という般化の問題や，自発性・維持の問題が指摘される（加藤, 2019)。定型発達のコミュニケーションスタイルに合った行動様式の習得が目指されるだけではなく，ASD 者の内的世界に着目して相互理解を深め，ASD 者自身が応用や般化が可能な支援を検討する必要がある。その方策として，ASD 者の自己表現を可能にし，内的世界が持つイメージを外在化させる描画表現を活用することが考えられる。描画表現には，日常の素材を用いて，他者の関与がなくとも自己表現が可能であり，描画者が世界をどのように捉えているかという知覚的意味を明らかにする（Merleau-Ponty, 1969）という利点がある。 実際に，描画表現を行う ASD 者の中には，創造的な行為から他者との関係を築くことが可能となり，他の分野における学びへと般化する力につ

ながったことが報告される（Furniss, 2010）。ASD を対象にした芸術療法では，自己意識を高めるために役立つこと（Emery, 2004）や感情面の効果（Martin, 2009），自己肯定感や自己感覚を増し，自己概念が高められたこと（Schweizer, Knorth & Spreen, 2014），自己の認識や社会的相互作用に変化がみられたとされる（Elkis-Abuhoff, 2008）。しかし，芸術療法での効果が持続し，般化が起こるためには，日常の生活空間の中でも自己表現を行うことが重要とみられる。そこで本研究では，芸術療法家のような専門家が介在しなくても実施でき，自己の内的な考えやイメージを表出させて平面の中に形を作り上げることを「描画表現」と定め，ASD における描画表現と自己との関連に着目する。

第 2 章 自閉スペクトラム症における自己理解

ASD においては，自己に不確実性をもち（綾屋, 2011），自己に対してトップダウン機能が不在の「空白の自己」と論じられ（Frith, 2003），自己理解ができていないために仕事に対する客観的な選択が困難な事例が多い（梅永, 2017）。自己理解とは発達するものであり（Damon & Hart, 1988），先行研究の発展（滝吉・田中, 2011）から，自己理解は「身体（外的属性）・行動・人格特性の 3 側面を含む，他者と区別するために認識される自己に対する考え」と定義される。ASD 者が自己理解を促進するためには，社交不安を軽減して他者参照能力を高めることが必要とされる（高岡, 2017）が，そもそも社会的相互作用に困難を抱える ASD 者にとって，社交不安を軽減して他者参照能力を伸ばすことは容易ではない。一方，ASD 者は自分の興味について関心をもって扱われることで自己感覚をより良く保つと論じられ（辻井, 1999），描画表現を行う ASD 者の例に見られるように，興味関心を映し出す描画表現は，その内的世界を共有する強力なツールとなりうることが考えられる。

第 3 章 本研究の目的と構成

そこで，本論文では，描画表現を通して，ASD 者の自己理解支援の発展に寄与する知見を提示することを目的とした。具体的には，以下の 3 つを目的とした。

目的 1：描画表現を行ってきた ASD 者の描画表現にまつわる経験について，他者関係がどのようなもので，自己をどのように捉えているかという観点から明らかにする。

目的 2 ：ASD 者が新たに描画表現を行うことを通して，他者との相互作用や内的経験にどのような影響があり，自己に対する理解への影響がみられるかを検討する。

目的 3：描画表現を介したコミュニティにおける他者との相互作用に着目し，どのような自己への影響がみられるかを明らかにする。

ASD 者が描画表現という非言語的表現とそれをもとにした言語的な語りを通して，描画表現が他者関係にどのように寄与し，自己にどのような影響をもたらすかということに関

する知見や，そうした他者との相互作用からどのような自己を見出すのかについての示唆が得られるものと期待される。

第Ⅱ部
自閉スペクトラム症の描画表現を通した主観的体験

第 4 章　自閉スペクトラム症者の描画表現による主観的体験（研究 1）

第 1 節 問題と目的

「目的 1：描画表現を行ってきた ASD 者の描画表現にまつわる経験について，他者関係がどのようなもので，自己をどのように捉えているかという観点から明らかにする」について，ASD 者の語りから仮説を導出することで，描画表現を通した自己に関する影響への理解が可能になると考えられる。先行研究が寡少であることから，探索的な検討が有効と考えられる。そこで研究 1 として，調査面接法による質的研究を行い，リサーチクエスチョン（以下，RQ とする）として，「描画表現によってどのような体験をし，その過程においてどのように自己理解へとつながるか」を設定した。

第 2 節 方法

日常的に描画表現を行っている 20 代～40 代の ASD 者 11 名（男性 7 名，女性 4 名）に対し，半構造化面接を行った。時間は，一人あたり 45 分～180 分であった。分析にはグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Corbin & Strauss, 2008; 操・森岡訳, 2012)を用いた。

第 3 節 結果と考察，第 4 節 総合的考察

分析の結果，24 のカテゴリが生成され，それらは RQ に関して，３つの段階に分けられることが見出された。全段階を統合した仮説モデルを Figure 1 に示す。{特性による生きづらさ} を抱える ASD 者は，描画表現を行う中で，【感情体験】という段階として《気持ちがスッキリする》に代表される気分の向上を体験する。次の段階では，《ありのままの自分を表現する》ことで《ありのままの表現が受け入れられる》という機会を得るようになる。この【外的体験】という段階において，《人と交わるようになる》に代表される交流の増加を体験する。さらに段階が進むと，それまで難しかった《人の気持ちを想像する》ことへも意識が向き，［思索］の＜多様＞へと進む。この【内面の深まり】という段階では，描画表現を介して《自信がつく》という自己肯定感の向上が得られ，《絵があるから生きられる》という認識をもつようになる。認知面が変容することにより気づきが生まれ，《自分のことがわかるようになる》という［自己理解］の＜多様＞へと促進されることが示唆された。

なかでも，{他者交流が広がる}は，【外的体験】の段階で主要な要素となるだけではなく，【内面の深まり】の段階についても重要な関連をもつことが考えられた。［交流］の強弱によって，思索の深まりや自己理解の促進が異なることが示唆された。描画表現を行う ASD 者の場合，絵を介すれば他者と交流しやすく，社交不安を軽減させられる可能性が窺えた。他者の描画表現にも触れることで他者の視点を取り入れることや，対人経験が増えて他者理解が増す場合があることが見受けられ，自己理解に重要とされる他者参照能力を高める可能性が示唆された。本研究が描き出した主観的体験のプロセスは，興味の世界を対象化できる絵により内的世界が共有され，自己感覚を保ちながら他者との相互作用が生まれ，さらに自己や他者についての考えを深めて自己理解につながるという，ASD 支援の一方策としての観点を寄与した。

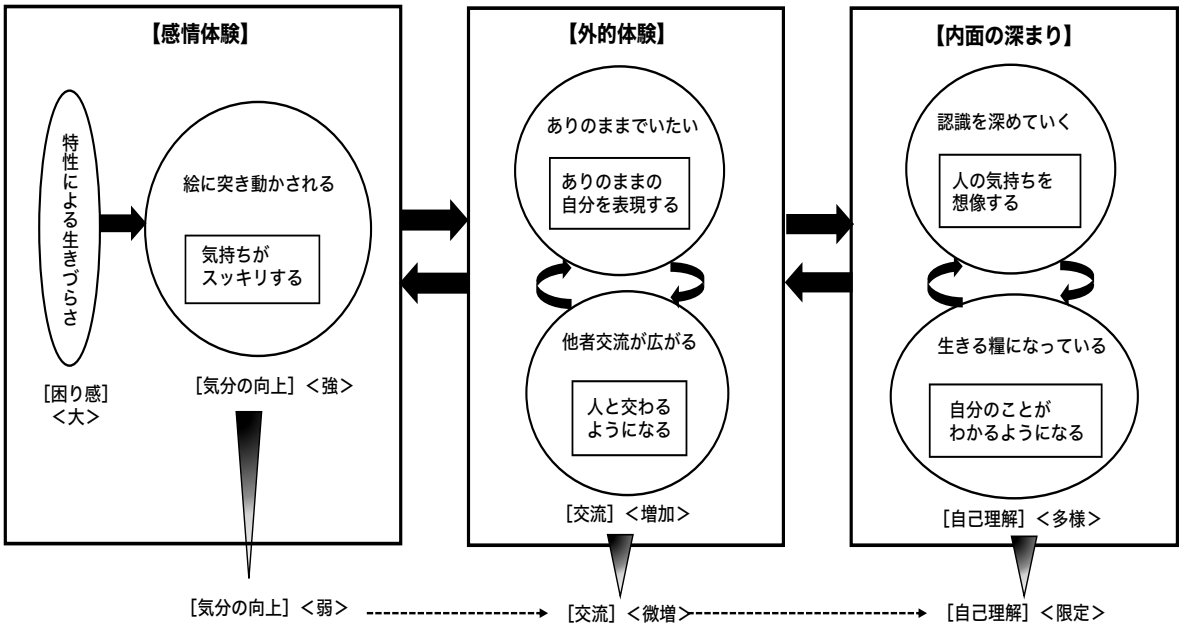

Figure 1　ASD 者の描画表現における体験の仮説モデル

第 5 章 描画表現を長年行う自閉スペクトラム症者の自己の語り（研究 2）

第 1 節 問題と目的

研究 1 では，経験を振り返る回顧的な調査であったため，描画中に経験されうるリアルな語りの抽出に限界があった。また，個々の自己理解の特徴についての検討が不十分であった。ASD 者の内的世界を見出すためには，その経験を個別の文脈から明らかにすることが重要であることから，事例の個別性を尊重し，その個性を研究する方法（下山, 2000）である事例研究を行うこととした。複数回のインタビューと描画表現を組み合わせたテストバ

ッテリーにより，ASD 者の語りから，描画表現をどのように経験し，その経験からどのような自己を理解しているかを明らかにすることが目的である。

第 2 節 方法

研究 1 の研究協力者であった，A 氏（30 代）に協力を得た。選定の理由は，描画表現活動が 17 年と長く，描画表現を生業としてではなく大事な趣味として行っていること，描画表現における主観的体験を豊富に持っていることが研究 1 の語りのデータから示されたことであった。調査における描画表現として，心の様相を浮かび上がらせるために創案された自分描画法（小山, 2016）を援用した。これは，「自分」「気になっているもの」「背景」「隠れているもの」という教示に沿って，それらのイメージを色鉛筆等で A4 の 1 枚の絵に表す手法である。また，描画表現の主観的体験に関する半構造化面接に加え，自己理解質問（Damon & Hart, 1988; 滝吉・田中, 2011b）を援用したインタビューを実施した。インタビュー調査は 5 回行われ，描画表現は 3 回目の調査で実施された。語りの分析には，リアルな内的世界を捉えるために，「生きられた経験の構造，その内的な意味の構造を明るみに出し，記述しようとする体系的な試み」（van Manen, 1997）とされる現象学的研究を採用した。

第 3 節 結果と考察，第 4 節　総合的考察

分析の結果，【自己を生かす】ことが本質的なメインテーマと見出された。メインテーマを中心として，［不自由で生きづらい自己］［自由な世界との出会い］［ありのままの自己表現］［ギリギリの局面からの救い］［社会的な受け入れ］［描画表現を通した自己形成］という 6 つのテーマが示された。［不自由で生きづらい自己］からは，「自分っていうものを持つことが許されなかった」という語りに示されるように，ストレスフルな状態が強調され，つらい状態から脱却するために描画表現を行ったことが明らかとなった。描画表現によって，［自由な世界との出会い］が実現され，［ありのままの自己表現］に行きつき，「病んでいてもいいし，とにかく，描く」ことを大切にしてきたことが窺えた。［ギリギリの局面からの救い］からは，「創作活動があるから，今生きている」と，描画表現が自己の救いであることが示された。［社会的な受け入れ］として，描画表現を公表することによって，「こういう自分でも受け入れてもらえるんだ」という感覚を得ていた。そして，［描画表現を通した自己形成］が体験されていた。「自分の心の中の意識化されていない部分を表出させたい」というのが A にとっての自己理解であるが，それは言語的に自分を理解するものではなく，描画表現とともに自己を創り上げていることが認識されていた。一般の表現者が創作過程で経るとされる自分について考えるという内的な基準の構築（横地・岡田, 2007）は見られ

ず，非言語的に表された感情の表出を含む自己との遭遇から，自己の状態や情動を感覚的に読み取り，他者からの受け入れを経験し，【自己を生かす】という経験構造があるものと示唆された。自分描画法の絵には，架空の生き物が描かれ，多数の手を持つ生き物にはハートが一つだけある。不気味さと神聖さという両極が混じり合い，多方面に向かう心性がありながらも，一つのハートからは，A の心が一つにまとまっているような救いの要素が窺える。

第Ⅲ部
描画法と PAC 分析を用いた自閉スペクトラム症者の自己の探索

第 6 章　描画法と PAC 分析による自己理解の検討（研究 3 ）

第 1 節 問題と目的

研究 1， 2 では，「描画表現にまつわる経験について，他者関係がどのようなもので，自己をどのように捉えているかという観点から明らかにする」という目的に対して，ASD 者が描画表現を通した自己理解への影響に関する仮説の生成を行った。このような自己理解にまつわる影響が，ふだん描画表現を行っていない者にもみられるのかどうかを明らかにする必要がある。そこで，「目的 2：ASD 者が新たに描画表現を行うことを通して，他者との相互作用や内的経験にどのような影響があり，自己に対する理解への影響がみられるかを検討する」について，描画表現とその体験に基づく語りを分析する研究を行うこととした。描画表現を手がかりに他者とともに自己の探索を行い，どのような自己の理解が深まるかを明らかにすることを目的とした。

第 2 節 方法

調査内容　研究協力者は，ふだん描画表現を行っていない 20 代～50 代の ASD 者 9 名（男性 4 名，女性 5 名）であった。研究 2 で採用した自己理解質問，自分描画法に加え，質問紙調査として，精神的健康度を調べるため，調査開始時と終了時に Kessler Psychological Distress Scale（以下，K6 とする）の日本版（Furukawa et al., 2008）の回答を得た。描画表現の体験について語るための仕掛けとして, PAC 分析（Personal Attitude Construct Analysis; 個人別態度構造分析; 内藤, 1997）を採用した。完成された描画について，思いつく限りの自由連想語をあげてもらい，その連想語の全ての対に対して 7 段階で類似度評価をしてもらって，それをもとにクラスター分析を行った結果であるデンドログラムを提示して，描画表現とその体験に基づく語りを得た。全員に対し 2 回の調査を実施し，各回の調査内容は，次の通り行った。第 1 回＝①質問紙調査（K 6 ），②自己理解質問によるインタビュー，③自分描画法，④PAC 分析（自由連想語と類似度行列の評定まで），第 2 回＝①PAC 分析（ク

ラスター分析の結果をもとにインタビュー），②自己理解質問によるインタビュー，③全体の振り返り，④質問紙調査（K６）。1 回目の調査時間は 65 分～3 時間９分，2 回目の調査時間は，１時間 20 分～３時間６分であった。

分析　描画表現とその体験に基づく語りのデータは，KJ 法（川喜田, 1986）による質的分析を行った。自己理解質問の回答（自己理解言及）については，自己理解分類モデル（滝吉・田中, 2011）を参考に分類を行った。描画前（pre）と描画後（post）で自己理解言及と K6 に変化が見られるかを，Wilcoxon の符号順位検定により分析した。

第 3 節 結果と考察

KJ 法の結果　KJ 法により得られた 69 のカテゴリをさらに分析した結果，【描画による自己表現】【否定的な自己イメージ】【他者関係で生きづらさを抱える自己】【絵に映し出される自己の関心と状態】【自己の特徴と新たな発見】という５つの大カテゴリが，描画表現をもとにした語りによる自己への理解として示された。これらの大カテゴリは，［表現過程で感じる自己］［従来の認識としての自己］［明確化される自己］という３つの領域に分類された。日頃，描画表現を行っていない ASD 者の多くは，【描画による自己表現】が実現されることで，［表現過程で感じる自己］に遭遇する。その描画表現には《自己否定的な思考》の表れとして，【否定的な自己のイメージ】が認識され，《普通にできる他者との違いに関する認識》や《他者との相互作用の困難》が日頃体験されることから，【他者関係で生きづらさを抱える自己】が見出される。この２つは，［従来の認識としての自己］として示された。しかし，描画を自己表現の成果物として検討することで，《描画から見える自己の関心》や《色に映し出される自己》が確認され，《絵から感じる自己の位置付け》が見える。これらは【絵に映し出される自己の関心と状態】を表す。さらに，描画について検討を重ねることで，《自己表現から認識される自己の特徴》が見出される。また，《自己の肯定的な要素の発見》という，従来とは異なる肯定的な観点が生まれる。自己の内的な要素を検討することが起こり，《描画と語りを介して認識される自己のあり方》を見出す。描画表現と語りを通した検討の結果，【自己の特徴と新たな発見】を得ると考えられる。これらから，［明確化される自己］へと至ることが示唆された。カテゴリ関連図を Figure 2 に示す。

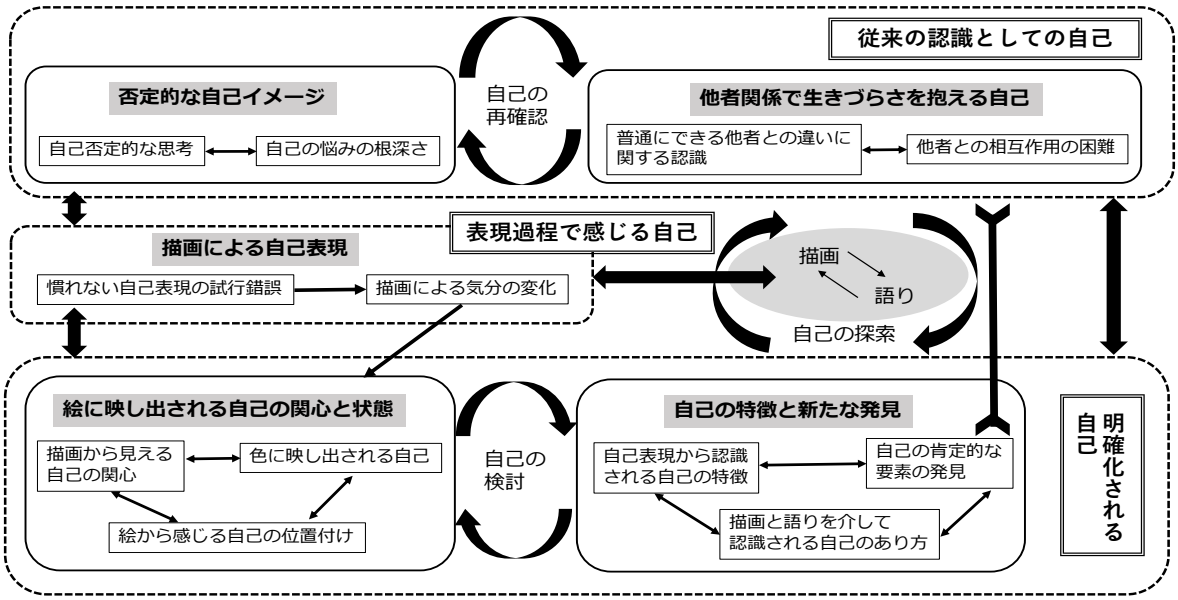

Figure 2　KJ 法による質的分析で得られたカテゴリの関連図

統計的分析の結果　自己理解言及数と K6 の得点について，研究協力者ごとに pre/post について比較した（Table 1）。post で自己理解言及数が増えた者は 7 名，減った者は 2 名であった。K6 については，8 名に post での低下がみられた。自己理解言及数と K6 の得点，自己理解分類の得点について，Wilcoxon の符号順位検定により pre/post を比較した。その結果，自己理解言及数の pre 平均値は 28.56（*SD* 7.65），post 平均値は 33.33（*SD* 6.80），p=.058 で，有意水準 5%において有意差はみられなかった。K6 は pre の平均値 9.56(*SD* 5.88)，post の平均値 6.11（*SD*5.73），p=.017 であり，post で有意に低いことが示された。また，自己理解分類では，post で有意差が見られたものは，行動スタイルの下位領域「注意関心」のみであった（p<=.028）。こだわりに関連する注意関心が ASD 者にとって重要とされる（滝吉・田中, 2011）が，post では異なる結果が示された。

Table 1　pre/post における自己理解言及数および K6 得点

ID	言及数pre	言及数post	増加率	K6(pre)	K6(post)
A	25	39	1.56	18	16
B	21	28	1.33	4	0
C	33	41	1.24	2	1
D	34	40	1.18	10	3
E	31	25	0.81	7	9
F	21	31	1.47	6	2
G	33	35	1.06	7	2
H	18	23	1.28	18	12
I	41	38	0.93	14	10

第 4 節 総合的考察

ASD 者の描画表現には，否定的な自己イメージや他者関係における生きづらさといった［従来の認識としての自己］が表面化されやすかったが，研究協力者全員の語りから，《自己の肯定的な要素の発見》というカテゴリが生成された。描画表現に対して抱く自らのイメージについて探索し，自己について検討を重ねる中で，自己の肯定的な側面が見出せるようになることが考えられる。ASD 者が自分について物語ることは，自己を肯定的に捉え直すための一つの有効な方法であると論じられ（亀井・武内・佐藤, 2011），描画表現をもとに自己について語る過程は，自己を肯定的に捉え直す契機となる可能性がある。また，描画表現によって自己の興味関心が表現され，自己について語ることを通して，注意関心というこだわり以外の自己の特徴が検討され，より内的な自己に関する理解が進んだことや，描画表現を手がかりに自己に対する肯定的な気づきや明確化がなされることは，精神的健康度の向上につながりうる効果があることが考えられる。筆者という他者とともに描画表現に映し出された自己の要素を検討することは，自己を省察的に捉え直す機会となる可能性が示唆された。

第 7 章　自己理解に相違性が見られた二事例の語りの比較（研究 4 ）

第 1 節 問題と目的

研究 3 では，研究協力者全員の語りのデータを分析し，全体として集約された結果を示したものの，「描画表現を行うことを通して，他者との相互作用や内的経験にどのような影響があり，自己に対する理解への影響がみられるかを検討する」ためには，個々の語りの変遷について抽出することが必要とみられた。そこで本研究では，自己理解言及数が描画後に増加した者と減少した者を対象に，共通性や相違性に着目して比較検討を行う。描画表現とそれに基づく語りから，ASD 者の内的な変化について明らかにすることを目的とする。

第 2 節 方法

研究 3 において，自己理解言及数の増加率が高い（1.47）F(40 代男性)，自己理解言及数の増加率が低い（0.81）E（30 代男性）の比較から，検討を行う。描画表現，PAC 分析で得られたデンドログラムと語りの検討，描画前と描画後における自己理解言及の変化の検討を行った。

第 3 節 結果と考察

描画表現　F においては，「自分」が眼鏡と口だけのアイコンのようにきわめて小さく描かれ，趣味である好きな曲の楽譜を主体に，黒をベースに赤と青が混じった絵が描かれた。色彩は限定され，全体的に空白が多く，寂しくやや暗い印象の描画であった。対して，E は「自分」を中心に全身像として大きく描き，関心事である時事情報を含めて動画に見立てて絵を仕上げた。「自分」の目や唇の色を何度も重ね塗りするなど，細部にこだわる様子が窺えた。

描画表現に対する解釈と自己　F においては，描画表現に対する自由連想語は 12 項目，クラスター分析の結果，F により，第 1 クラスター（以下，C1 とする）は「闇」と名付けられ，第 2 クラスター（以下，C 2 とする。第 3 クラスター以降も同様に C3 等と表記する）は「後光が差している」と命名された。これらの検討から，「物心ついたときから，ずっとそういう感じ」という暗いイメージの自己と，「そのときの状況によって， 被り変える仮面」であるが，生存欲求と明るい要素を持つ自己という二面性があることを見出した。一方，E においては，自由連想語は 10 項目が生成され，C1 を「興味の始まり」，C2 を「事実・内容」，C3 を「性格・性質」，C4 を「細部・こだわり」と名付けた。これらを検討した結果，「パターン化されたものが得意」「細部にまでこだわってしまう」といった自己の特性が明確化され，「会社組織に入ったとしても，（略）たとえば経理で，どれだけ経費を削減できるかとか，そういう細部にひたすらこだわり続ける方が向いている」と，仕事でも活かせる自己の特徴について理解が進んでいることが示された。

自己理解言及の変化　F については，pre では回答が得られなかった「自分の好きなところ」「嫌いなところ」について，post では回答ができるようになり，感情面を封印し，感情認知がされにくい自己の傾向について認識がなされた。そのため，自己理解分類の「人格特性」という上位領域のうち感情面を表す「非情動情動」という下位領域が，post において最も言及数が多くなるという変化が見られた。E については，pre では非現実的で拡散した内容の自己理解言及がみられたが，post では対人面に関する現実的な回答が得られ，他者との相互作用から自己をとらえる言及の増加が見られた。自己を肯定的に捉える動きも見られたが，F のような感情面に関する自己理解の変化は示されなかった。

第４節　総合的考察

Ｆにおいては，感情認知に変化がみられ，自己理解のバリエーションが増えたことが示唆された。一方，自己理解言及が減少した E においては，より現実的に捉える自己理解のまとまりが示唆されたが，自己理解のバリエーションは減少していた。両者とも，描画表現について検討する中で，日常生活での行動と結びつけて，自己の感情や対人行動，あるいは特性について理解を深めていたことから，ASD 者が描画表現を他者と共有して自己について語るという意義はあると考えられた。描画表現には言葉では表現できない内なる経験，特に感情にまつわるものが含まれる（Jue & Kwon, 2013）ことから，それを介して感情認知が進む可能性がある。また，選好性（preference）に関して ASD 者は定型発達と差異がある（本田, 2018）とされるが，描画表現を通して，ASD 者の選好性について本人も理解を深め，自己の特徴が見出される可能性が示唆された。ASD 者が着目しやすい部分の探索から始め，しだいに全体的な検討へと認識を深めていくような過程が重要とみられた。

第８章　描画表現の繰り返しによる自己の探索についての事例研究（研究５）

第１節 問題と目的

研究３，４では，ASD 者の描画表現とそれに基づく語りを通して自己理解に変化がみられるかを明らかにした。しかしながら，描画表現が１回のみという限界があり，さらに調査を重ねる必要があると考えられた。そこで本章では，一事例に対し，描画表現を繰り返す縦断的な研究を行う。RQ として「描画表現を繰り返すことを通して，どのように自己を探索し，気づきを得るか」を設定し，探索的な事例研究を行う。

第２節 方法

研究協力者　研究協力者として，ASD 特性による生きづらさのバリエーションが多く，就労において問題が生じた経験があり，AQ（日本語版自閉症スペクトラム指数; 若林・東條, 2004）得点が基準値である 33 点を超える 20 代の女性 A に協力を得た。A は研究３の研究協力者でもあり，研究４の事例が男性のみであったのに対し，女性を対象に事例研究を行う意義があると考えられた。A は，就労継続支援 B 型事業所（以下，作業所とする）に通い，グループホームに暮らしていた。感情制御が難しく，作業所への通所は不安定であった。

調査内容　研究３，４と同様の自分描画法と PAC 分析を３セット繰り返し，調査は X 年８月～11 月にかけて４カ月，計７回に及んだ。

分析　語りの内容は，内藤（1997）を参考に語りの解釈を行い，最終回の総合インタビューを含めて，総合的な解釈を試みた。

第３節 結果と考察

第１セット　描画は,「自分」を真ん中で割れたハートを描き,「気になるもの」や「隠れているもの」では簡素な他者が複数描かれた。自由連想語は９項目で, C1 は「白と黒の世界」, C2 は「荒廃した世界」, Ｃ３は「原色の世界」と命名された。描画表現をもとに検討した結果，感情制御の困難として「荒れがちな自分」が自覚され,「絵にすると，自分はこういうことに悩んでいたんだな」と，日頃の悩みが明確化された。

第２セット　描画は,「自分」としては, 青い涙の粒をたくさん流す棒人間が大きく描かれ, その右に「気になるもの」として天秤が描かれ，秤に赤と青のハートが載せられた。その下に「隠れているもの」として小さな複数の棒人間が描かれた。前回よりも色彩が明るくなっていた。10 項目の自由連想語から，C1「社会」, C2「心象風景」, C3「感情の世界」が命名された。「人に対する怖さっていうのは根強い」こと,「自分の感情を大切にするっていうイメージがなかったので，本当は，大切にしてたんだなって」と，自己の感情への気づきが示された。

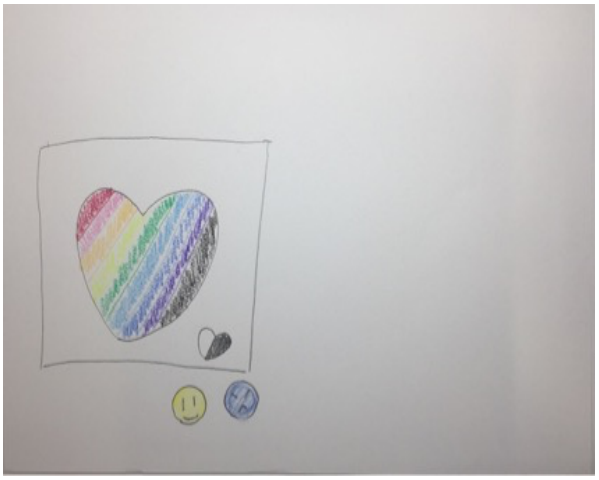

Figure 3　A の第３回の描画

第３セット　描画は,「自分」についてはカラフルなハートが描かれ,「気になるもの」として，笑顔と怒っている顔という，他者の顔に初めて表情が現れた。「隠れているもの」では小さな白黒のハートを描き，完成した絵の右半分は空白だった（Figure 3)。自由連想語は８項目で, 明るい印象の言葉が並んだ (Figure 4)。C1「理解しやすい世界」, Ｃ２「居心地のいい世界」, Ｃ３「脚色の世界」と名づけられた。描画表現を検討した結果,「自分のグラデーションの感情もよりよく受けとめたいっていう気持ちの現れ」「悩みで，割り切れるようになった」という変化が示された。また，実生活で他者交流が増えたという行動面の変化，理不尽なことでも乗り切ろうとする認知面の変化が示された。

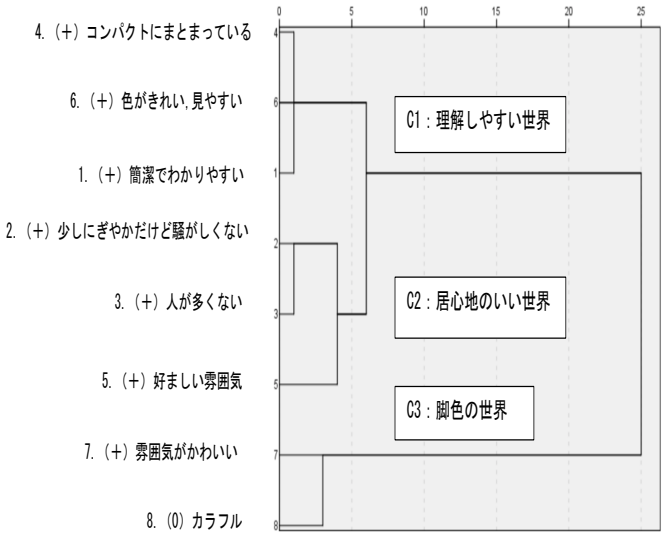

Figure 4　第３回のデンドログラム

総合インタビューを含めた解釈　A は描画体験を振り返って,「自分の感情に深く入っていって，まとまりも出てきている。顕微鏡で覗くみたいな」と語り,「最近は感情的にも安定していて，作業所にも安定して休みなく行けるようになった」と，日常生活での変化を示した。「他者を見ていても，それは自分の感情を通して他者を見ている」という，他者への認識を深めたことによって，自己理解が進んでいることが示唆された。一方で，描画には自己の内面が現れるため,「しんどかった部分もあるんじゃないか」と，振り返り，それでも調査を続けたのは，自己を見つめる動機があり，自己の人格特性を知ることで生きやすくなるのではないかという気づきを得ていた。

第 4 節 総合的考察

ASD 者は定型発達者と比べて感情面の自己認識が低いとされ（Huggins, Donnan, Cameron & Williams, 2021），A も感情面の困難を抱えていたが，描画表現によって感情に注意が向き，捉え直す機会が生まれた。「感情を顕微鏡で覗くみたい」と語ったように，感情の細部に注意が向き，描画表現にも他者の表情が描出され，感情理解が進んだとみられる。また，描画表現と語りの繰り返しによって，日常生活においても感情の安定化や行動・対人面の活性化，認知の変化と，自己理解につながる影響がいくつか示唆された。「視覚イメージによって語り，視覚イメージとことばのコラボレーションによって語る」というビジュアル・ナラティヴの手法（やまだ, 2018）は，ASD 者に対しても適用可能とみられた。すなわち，ありのままの非言語的表現を媒介にして他者との間で言語的表現がやりとりされ，この往還の中で他者との相互作用が生まれ，自己理解につながる自己の探索が可能になることが示唆された。

第Ⅳ部
ICT 活用の描画コミュニティを介した自閉スペクトラム症者の自己

第 9 章　ICT を活用した描画コミュニティにおける自閉スペクトラム症者の自己表現
―描画を介した他者関係に着目した実践的研究―（研究 6）

第 1 節 問題と目的

研究 3 ～ 5 では，ASD 者が描画表現を行うことで，他者（筆者）との間で描画をもとにした対話を行い，視覚的表現に現れた自己を検討することが可能となり，自己の立ち位置が見え，自己について明確化された。描画に自己の肯定的な要素を見出し，描画前と比べて描画後には精神的健康度が改善されることが示唆された。また，感情面についての気づきを得ることで，自己理解のバリエーションが増えることが考えられた。一方で，自己理解のバリ

エーションが減少し精神的健康度が低下する例もみられ，そのような事例では現実に即した自己のあり方や自己の特性を活かす肯定的な認識が見出された。描画表現の日常における影響を検討するには，描画の回数が少ないことや，日常の生活空間とは異なる調査の場面での描画表現であること，描画の共有と語りの相手である他者は筆者のみであり，本人にとって適応的な自己理解という観点の不在という限界があった。「目的３：描画表現を介したコミュニティにおける他者との相互作用に着目し，どのような自己への影響がみられるかを明らかにする」ためには，複数の他者との間で描画表現を通したやりとりがなされる必要がある。

以上のことから，ASD 者を対象にした描画コミュニティにおける実践的研究を行い，描画によってどのような自己表現が実践され，どのような他者との相互作用が生じるかを明らかにすることとした。近年，ICT を活用した ASD 者の他者交流の利点が報告され(Jordan, 2010; 池上, 2017)，描画アプリを導入することで日常の生活空間の中で自己表現を実現できるとみられた。そのような描画表現がオンライン上で複数の他者との間で共有されることで，他者との相互作用がどのように生じるのか，その体験が自己にとってどのようなものかを明らかにすることを目的とする。

第 2 節 方法

研究協力者および調査前準備　20 代～50 代の ASD 者 11 名（男性 5 名，女性 6 名）に研究協力を得た。描画アプリはアイビスペイント（株式会社アイビス, 2021）を利用し，研究協力者には事前に自身のスマートフォン等へのダウンロードを依頼した。ICT を活用した調査を行うにあたり，1 名に対し予備調査を行い，オンライン上でのやりとりや，描画アプリを用いることに支障がないかどうかを確かめた。次に，描画のワークショップを開催し，全員に対して描画アプリの試行をしてもらい，他の研究協力者とのやりとりを体験してもらうことで，調査の継続が可能かを確かめた。リアルタイムでのやりとりは全て Zoom にて行い，筆者を除き，研究協力者は全員画面オフ，匿名での参加とした。個人情報の取り扱いについても事前に留意事項を伝え，同意書への署名を得た。

本調査　調査の開始前と開始後に，K6，主観的幸福感尺度（伊藤他, 2003; 小島, 2018），自尊感情尺度（小島・納富, 2013）の質問紙調査を実施した。描画調査は 2021 年 11 月～2022 年 1 月の 3 カ月実施し，描画および研究協力者限定 SNS での作品の公表，相互鑑賞，コメントのやりとりを行った。SNS は，Slack を利用した。描画の公表は月 2 回以上，コメントの掲載は月 5 回以上を推奨した。推奨の回数以上行った研究協力者に対しては，謝礼として電子ギフト券が支払われた。描画のテーマは自由とし，迷った場合は，自分描画法や筆者

が設定するテーマを選ぶこととした。調査終了後，描画体験と他者とのやりとりに関するアンケート調査を実施した。

分析　描画については，描き手のコメントから主題を特定し，主題別にタイプ分けを行った。コメントは掲載された数を調べ，どのような相互作用が展開されているかに着目して，顕著な例について描出した。また，アンケート内容については，描画の実施状況や描画コミュニティ体験の感想について特徴的な内容を記述した。質問紙調査は，pre/post の比較を Wilcoxon の符号順位検定によって分析を行った。

第 3 節 結果

描画　中途離脱者はみられず，11 人から全部で 69 の描画が公表された。主題のタイプ別の描画数は，「キャラクターや漫画等」が 13，「風景イメージ」が 10，「身近なもの」が 8 という順に多かった。描画表現のタイプが毎回変わるバリエーションの見られる者は 3 名のみであり，多くは描画表現のタイプに個別の偏りが見られた。

コメント　コメントは計 692 が記載され，一人あたり平均 62.9 であった。月単位では一人平均 20.96 回のコメントが書き込まれた。コメントの内容は，描画に対する感想や質問，描画の意図や込められた意味の読み解き，描き手の日常生活に対する激励や応援，描かれた出来事への共感や自分の知っている事柄に関しての情報など，多岐にわたっていた。1 枚の描画に込められた意味や意図について，鑑賞者が描き手の生活背景も想像しながらやりとりしていることが示された。「もう〇〇さんの気付きやユーモアたっぷりに感じられた絵が見れなくなってしまうのが淋しいくらい本当に毎回楽しかったです」というコメントからは，他者の個性を把握していることが窺えた。

アンケート　描画アプリの使用状況は，毎週使用した人が半数以上であり，1 枚の描画につき平均的な制作時間は 2 時間未満が 7 割を超えたが，なかには平均 5 時間以上かけていた者もいた。テーマについては，69 作品のうち自由なテーマで描かれたものが 59 作品（85.50%）と大勢を占めた。描画継続の理由については，「他の方も絵を描いていて，それがモチベーションにつながった」「**褒めてもらえるコミュニティ**に参加したいから」といった他者との相互作用の影響があることや，「**自分の気持ちを絵で表現する**ことが楽しかったからかな」と内的な理由があることが示された。他者との交流については，「他者に何か言葉をかけたとき，**誤解して取られて失礼だと怒られることが多い**のですが，（略）誤解されないような文章を書くことを心がけていた」と，実生活の自己をふまえてやりとりを意識したことや，「**作品に対して意見を表明するというタイプのコミュニケーション経験**」「**自己肯定感が上がった**」と，肯定的な意見が示された。研究全体を通して得たものとしては，「自己表現

の仕方は自由であり，間違っていてもおかしくても**受け入れてくれる場**があれば，それだけで大丈夫なんだ」という，非言語的表現だからこそ得られる体験であったことが示唆された。

統計分析　pre と post を比較したところ，いずれも 5%水準で有意差は示されなかった（Table 2）。しかし，K 6 については，pre が平均 9.09（*SD*=6.07）に対し，post では平均 6.55（*SD*=2.98）と低下する傾向がみられた。研究協力者 11 人中 7 人において post では得点が低下し，2 人においては変化がなく，残りの 2 人において上昇がみられたことから，一部の研究協力者においては，精神的健康度が向上した可能性が見受けられた。

Table 2　描画前（pre）と描画後（post）の K6，主観的幸福感，自尊感情の得点

ID	K6(pre)	K6(post)	主観的幸福感(pre)	主観的幸福感 (post)	自尊感情(pre)	自尊感情(post)
A	12	9	27	27	34	28
B	3	6	40	37	38	37
C	13	10	34	36	24	29
D	0	0	39	41	30	40
E	19	9	19	29	23	30
F	5	4	36	36	32	35
G	3	9	36	38	41	34
H	8	8	20	26	15	18
I	8	7	36	38	30	31
J	12	6	33	32	24	21
K	17	4	41	38	36	29
M (***SD***)	9.09 (6.07)	6.55 (2.98)	32.82 (7.60)	34.36 (5.05)	29.73 (7.66)	30.18 (6.49)

第 4 節 考察

研究協力者の全員が最後まで調査を続けられた要因としては，謝礼という具体的なモチベーションもあったといえるが，それ以上に，他者も同様に描画に取り組んでいる様子が SNS 上から伝わってくることで刺激を受け，自分もやらなければという義務感も強かったことが窺えた。ASD においては，構造化されない状況よりも構造化された状況が有効とされ（Schopler, Brehm, Kinsbourne & Reichler, 1971），オンラインという枠組みの中で定期的に描画を公表するという構造化された活動は継続しやすく，描画を通して視覚的に周囲の様子が捉えられることも，自身の行動喚起へと結びつけやすかったことが考えられた。青年

期・成人期の ASD 者はほぼ半数において相互作用的に活動を共にする同年代の仲間が一人もいないという（Orsmond, Krauss & Seltzer, 2004）。しかし，本研究で示された ASD 者間の交流からは，描画を通して他者への関心を高め，実際に他者と関わるという相互作用が可能となりうることが推察される。コミュニティにおいて描画という自己表現が媒介物となって他者との間をつなぐという，三項関係が創出されたとみられる。非言語的表現を通してありのままの自己を伝え，他者との相互作用を楽しむ土壌が生まれることが推察された。

第 10 章　描画コミュニティ体験を通した自閉スペクトラム症者の自己への気づき
―他者との相互作用に着目したフォーカスグループの語りの分析―（研究 7）

第 1 節 問題と目的

研究 6 で示唆された他者との相互作用について，ASD 者自身はどのように捉えているか，他者との相互作用は ASD 者の自己に何をもたらしているかについても調べることが重要とみられた。「描画表現を介したコミュニティにおける他者との相互作用に着目し，どのような自己への影響がみられるかを明らかにする」ために，全員の研究協力者に対してフォーカスグループを実施し，描画表現と描画コミュニティの体験について探索的に検討することとした。

第 2 節 方法

調査　研究 6 の研究協力者を 6 名と 5 名に分け，フォーカスグループ（Focus Group; 以下，FG とする）を 2 回実施した。参加者の相互作用的な議論を通して豊かなデータを得ることが可能とされる（Vaughn, Schumm & Sinagub, 1996）インタビューの手法であり，描画コミュニティにおける相互作用を明らかにするためには有効とみられた。モデレーターは筆者が担当し，Zoom の利用や参加条件については研究 6 のワークショップと同様であった。

分析　FG で得られた語りのデータは，SCAT（Step for Coding and Theorization; 大谷, 2008; 2011）に準じて質的分析を行った。小規模の質的データからの深い分析に有効な手法であるとされ，FG の語りを深く追求しようとする本研究の目的に適していると考えられた。FG のインタビュー時間は，2 時間 1 分～ 2 時間 10 分であった。

第 3 節 結果と考察

SCAT の分析シートによって抽出された構成概念は合計 328 であった。これらの構成概念を共通性や差異性に着目しながら比較検討のうえ分類した結果，19 のカテゴリが抽出された。さらに 19 のカテゴリから，【描画アプリで絵を描く体験】【表現の特徴の発見】【自己への気づき】【日常生活における変化】【他者関係とコミュニティ】という 5 つのテーマが生成された（Table 3）。アルファベットは ID で，該当があるカテゴリに◯を記す。

Table 3　フォーカスグループの語りの分析結果

テーマ	カテゴリ	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	該当者数
描画アプリで絵を描く体験	馴染みのない描画への抵抗感	○	○	○			○	○	○	○	○		8名
	他者参照と機能活用による描画の試行錯誤		○	○	○	○	○	○		○			7名
	描画の感覚的面白さ		○		○	○	○		○	○		○	7名
表現の特徴の発見	他者比較による描画の相違性		○		○	○	○		○	○			6名
	興味関心の率直な反映		○	○		○		○	○	○			6名
	反復的な表現の方向性	○	○	○	○	○		○		○	○	○	9名
自己への気づき	こだわりに集中する自己	○	○					○	○	○			5名
	身近なモノ・コトが気になる自己	○		○				○		○	○		5名
	思いを伝えようとする自己			○		○	○	○	○	○		○	7名
	他者に対するスタンスを認識する自己	○	○		○	○				○	○	○	7名
日常生活における変化	描画の習慣化			○			○		○	○	○		5名
	「いま」と「過去」を見つめる視点	○		○			○			○	○		5名
	主体的な行動の広がり		○			○		○			○	○	5名
	セルフ・ケアのきっかけ			○		○			○	○	○	○	6名
他者関係とコミュニティ	コミュニティ参加に伴う戸惑い	○	○	○			○			○		○	6名
	他者の描画から見出す多様性	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	10名
	相互作用から見出す観点の個別性			○	○	○	○	○	○	○	○		8名
	描画コミュニティへの参加意義	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	10名
	描画コミュニティ体験から理解される自己	○		○	○	○	○	○	○	○	○		9名

ふだん絵を描いていない ASD 者は，【描画アプリで絵を描く体験】として当初，馴染みのない描画への抵抗感を抱くが，表現を形にしようと描画の試行錯誤が始まる。【表現の特徴の発見】として，他者との比較により自己の描画の相違性を感じる。また，自己の興味関心が率直に反映されていることや，特定の反復的な表現の方向性があることを見出す。このような描画体験を重ねるうち，【自己への気づき】が得られる。細部固執性や関心対象の限局性といったこだわりに集中する自己や，描かれている対象から身近なモノやコトが気になる自己に気づく。描画に気持ちが投影されるため，思いを伝えようとする自己を見出す。また，【日常生活における変化】が生じる。描画が習慣化され，「いま・ここ」を観察し，過去の出来事を振り返る視点が生まれる。日常が活性化され，主体的な行動の広がりが起こる。創造的な活動は自信につながり，興味関心が表れている描画を眺めると自己の癒しとなることから，セルフケアができていることを実感する。一方，描画を介した【他者関係とコミュニティ】については，最初は戸惑いを覚えるが，他者との間で互いの作品を鑑賞し合い，感想を述べ合う交流が始まる。他者の描画に関心を抱いてその個性が理解され，自己表現の多様なあり方に気づき，ものの見方は人それぞれであるという個別性を認識するようになる。率直な自己表現が可能でありながら適度な距離感が保たれるという，描画の介在効果に

よるコミュニケーションに安心感を得て，描画コミュニティの参加意義を感じる。このような描画コミュニティ体験から理解される自己として，他者とは異なる自分らしさを肯定する意識が生まれていた。

第 4 節 総合的考察

描画表現を行う過程においても，細部へのこだわり，完璧さの追求，興味関心の限局性，集中による過重労力，反復的な表現の方向性といった，自己の特性に関連する認識がなされていた。このような従来の自己の認識に加え，描画によって感情表現がなされ自己の感情理解につながることや，描画表現を通して観察という行為が生まれることの効果，描画を通して，自己の内的世界を対象化して捉えるようになることで自己の特徴の明確化がなされ，新たな気づきやセルフケアにつながる可能性が示唆された。描画コミュニティの意義としては，描画が介在することの効用が示唆された。画面上で描画が媒介物として他者との間に存在するため，相互の視点は何よりも描画に向くという一定の距離感が生まれ，意見を述べやすい利点があったと考えられる。つまり，緩衝材的な効果があり，安心できる他者との相互作用の中で，他者の反応から気づかされることを通して，否定感を抱かずに自己を検討できたのではないかと考えられた。自己の興味関心や経験への共感性と相互的受容感が得られることによって，自己の特徴を認識しやすくなったことが見受けられた。ASD 者は，同じ ASD の他者に対しては，共感的な反応を示すことが報告され（Komeda et al., 2015），ASD 者同士という類似性がある中での相互作用の場合，共感が生じやすく相互的受容感が生まれることが推察された。このような中で他者参照が生じやすく，自助グループのような機能が生じていたことが示唆された。

第Ⅴ部
総合考察

第 11 章　自閉スペクトラム症者の描画表現を通した内的世界の理解

本論文では，描画表現を通して，ASD 者の自己理解支援の発展に寄与する知見を提示することを目的として，研究 1 ～7 を行ってきた。当初掲げた目的に対し，以下の知見を得たものと整理できる。

目的 1：描画表現を行ってきた ASD 者の描画表現にまつわる経験について，他者関係がどのようなもので，自己をどのように捉えているかという観点から明らかにする。
描画表現に関して，他者交流が増加するほど，他者参照能力が高まって思索が深まり，自己理解が多様になる可能性がある（研究 1）。

描画表現を長年行う場合は,「自己を生かす」という機能が生まれ，意識化されない自己を理解し，描画とともに自己形成がなされる意義があると捉えられる（研究２）。

目的２：ASD 者が新たに描画表現を行うことを通して，他者との相互作用や内的経験にどのような影響があり，自己に対する理解への影響がみられるかを検討する。
描画表現を他者とともに検討することを通して，従来の否定的な自己だけではなく，自己の肯定的要素が捉えられる。特に感情面の自己理解が進む場合は，自己理解のバリエーションが増加すること，日常生活でも行動の活性化，感情・認知において肯定的な理解が促進される可能性がある（研究３・研究４・研究５)。

目的３：描画表現を介したコミュニティにおける他者との相互作用に着目し，どのような自己への影響がみられるかを明らかにする。
描画表現が介在することで，他者との相互作用が安心できる距離感の中で生まれる。ありのままの自己表現が受け入れられるという被受容感の中で自己を検討することが可能となり，他者の多様性や個別性を認めることを通して，他者とは異なる自己の特徴を理解する（研究６・研究７）。

本研究の描画表現を通した自己理解と他者関係の仮説モデルを簡潔にまとめると，Figure 5 のように示される。ASD 者は空白の自己（Frith, 2003）や自伝的自己（Damacio, 2010）の希薄さを抱えると考えられるが，描画表現を行い，その描画を他者との間で共有することで，自己―描画―他者という三項関係が生まれる。ASD 者の他者との距離の取り方は，定型発達者と比べてばらつきが大きいことが知られる（Perry et al., 2015）が，描画が介在することによって，ASD 者が自らその位置関係や距離感を調整しやすくなる。他者との一定の距離感を保ちながら，自己の興味関心や経験について関心を持たれているという共有感覚が生まれ，他者参照が生じる。また，描画表現は通常，複数の他者に対して共有されたり，他者の描画表現を鑑賞する機会が生まれたりすることから，このような三項関係は複数生まれる。そうした複数の三項関係の中で，他者参照によって自己を他者と比較したり，他者の多様な観点に触れたりして，自己の探索や検討が展開される。その中で省察が生起し，自己への影響への相互作用が生じていく。他者からは描画の肯定的な反応を得られることがあることから，他者参照・他者比較と自己への影響の往還の中で省察が進み，自己の特徴を明確にし，自己への気づきや自己肯定感へとつながる。それが複数の他者との間で進むこと，つまり他者参照・他者比較が多様になることによって，他者交流の増加や他者理解へとつながり，対人関係における行動の活性化へと進む。そしてこの他者関係への影響と自

己への影響との循環の中で，省察や原自己・中核自己（Damacio, 2010）との相互作用が進み，自己理解の促進に寄与する可能性が示唆された。これらのことから，自己への影響が空白の自己や自伝的自己の希薄さを埋めていく可能性が考えられた。

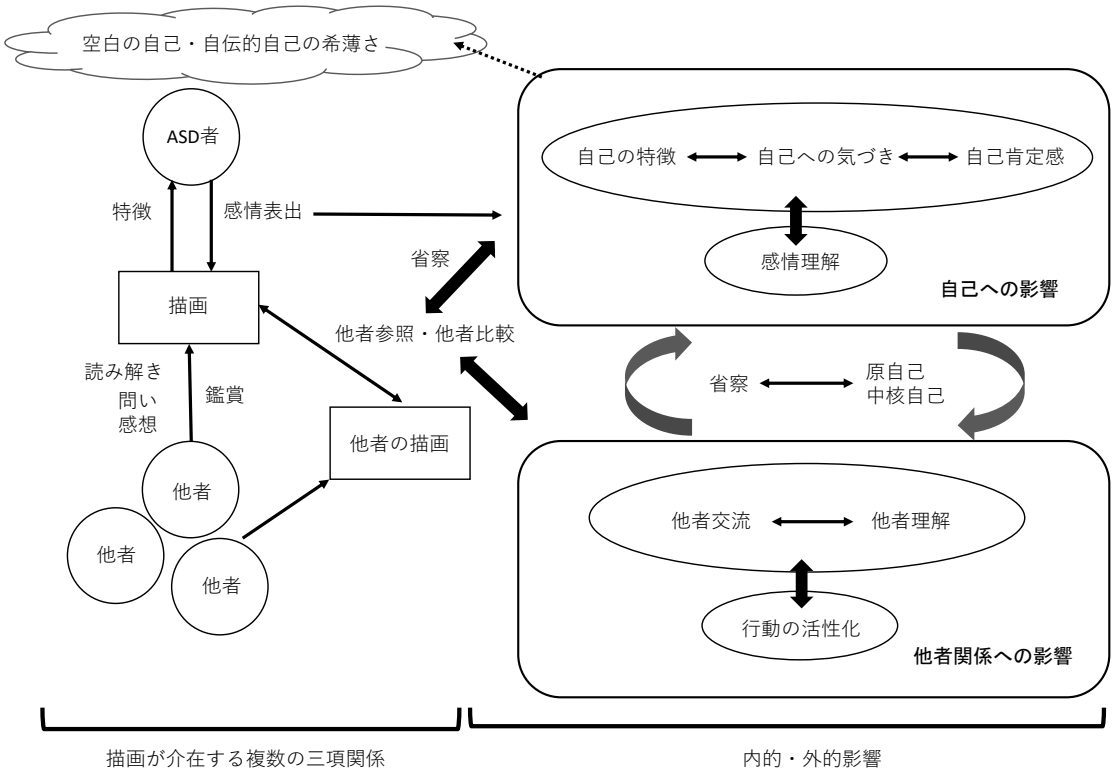

Figure 5　ASD 者の描画表現を通した自己理解と他者関係の仮説モデル

注：片方向の矢印は生起の順序を，両方向の矢印は相互作用や相補関係を，太い両方向の矢印は特に影響が強いとみられる相互作用を，矢印のサイクルは循環関係を，波線の矢印は減少作用を示す。

第 12 章　本研究の限界点と今後の展望

本研究の限界点として，サンプル数の少なさ，質的研究に限られているという研究デザインの問題や筆者の内省性の限界，縦断的な研究における調査期間の短さ，研究協力者が高機能 ASD 者に限られ，　一般成人を対照群とした比較検討がなされていないことがあげられる。しかしながら，ダイバーシティの時代と謳われる昨今，ASD 者の内的世界への理解を可能にする自己表現は，ますます注目が高まる可能性が考えられる。今後はネットワーク分析といった量的研究の導入を視野に入れ，ASD 支援につながる自己理解と他者関係に関する事象を捉える研究の発展が求められる。